

申請者:南 起錫

論文題目 日本企業の会計利益の質と資本市場

審査員 加賀谷哲之
新田 忠誓
花枝 英樹

本論文の目的は、日本企業の会計利益の質と資本市場との関係性を実証的に解明することにある。海外ではエンロン、ワールドコムなど経営者のアーニングス・マネジメントを契機とした経営破たんが相次ぎ、会計利益の質に対する懸念がささやかかれていたにもかかわらず、その実態は実証的に解明されていなかった。本論文はこうしたわが国企業の利益の質を分析し、その実態を明らかにすることを目的としている。

本論文の長所は、つぎのとおりである。

第1に、日本企業の利益の質が株式市場でどのように評価されているかについて複数の検証結果を通じて明らかにしている点である。これまでのわが国でも利益の質に関する研究が進められてこなかったわけではないが、その多くは経営者のアーニングス・マネジメントの実態を解明することに重きがおかれており、利益の質そのものに直接フォーカスをあててはこなかった。本研究では、経営者の裁量的な会計行動、利益の時系列属性、利益に対する株式市場の感度などを利益の質の実態を解明しようと試みている点は評価できる。

第2に、日本企業の利益の質に対する株式市場の反応について、複数の新事実を発見している点である。たとえば、日本企業の利益に対するマーケットの評価と米国企業のそれとの比較を通じて、日本企業の利益に対する株式市場の反応が鈍い点、また日本企業の保守的な会計処理に対する株式市場の反応などは、これまで必ずしもアメリカないしは日本の先行研究で解明されてはこなかった発見である。こうした点は、今後の「利益の質」研究においても抑えておくべき重要なポイントであり、これらを明らかにしている点は評価できる。

しかし本論文にも問題がないわけではない。その1つは、本論文で検証されている概念の多くが実証的な会計分析で世界を先行しているアメリカに依拠しており、日本企業の実態に一部そぐわない点が見受けられることである。また筆者が活用している会計学上の概念の中には、一部筆者の誤謬と思われる箇所も見受けられる。

ただしこれらは本論文の長所を損なう物でなく、筆者の今後の努力と更なる研究で克服が可能である。なにより、日本企業の利益の質を多角的な視点で、実証的に分析し、その実態を解明した貢献は大きいと思われる。よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。